岐阜新聞真学塾

出題　螢雪ゼミナール 大垣駅前校・築樋拓真

問題【国語】

次の和歌について、掛詞になっている箇所を指摘しましょう。

大江山　いく野の道の　遠ければ　まだふみもみず
天の橋立

豆知識 雑学コラム　才能あふれる和歌

今日は、小倉百人一首にも選ばれている小式部内侍（こしきぶのないし）の和歌を見ていきましょう。小式部内侍の母親も、小倉百人一首に選ばれている有名な歌人である和泉式部で、小式部内侍もその和歌を詠む才能を受け継いでいます。上記の和歌にもその才能があふれています。この和歌に関するエピソードを読みながら小式部内侍のすごさを見ていきましょう。

和泉式部が小式部内侍から離れて、天の橋立の近くに住んでいたころのことです。ある時、小式部内侍が和歌を詠む集まりに呼ばれることになりました。そこへ藤原定頼がやってきて、まだ、若くて無名の小式部内侍に向かって「母親に代わりに和歌を詠んでもらうように手紙を書いた方がいいのではないですか」とからかいました。その時に小式部内侍が定頼に即興で詠んだ歌が上の和歌だと言われています。この和歌は「大江山と生野を通って行く道のりが遠いので、まだ、手紙を届ける人は母のいるところまで踏み入れていないですし、返事のふみももらっていません」という意味です。即興で和歌を詠むこと自体すごいのですが、それ以上に、定頼を驚かせた工夫があります。その工夫の一つが掛詞です。

掛詞とは「一つのことばに二つの意味を持たせる」和歌の技法のことです。掛詞を駆使することで、たった31文字の中にいろいろな思いを込めることができます。上の和歌の中には「いく」を地名の「生野」と「行く」、「ふみ」を「踏み」と手紙の「文」と２回も使われています。即興で掛詞が二つも入っている和歌を詠むなんて、すごい才能ですね。この話が広まって小式部内侍は有名な歌人の一人となりました。

さて、古文の中には今回の小式部内侍のように主人公が素晴らしい和歌を詠むことで窮地を脱し、ハッピーエンドを迎える話がある一方、下手な和歌を詠んで悪い結果になる話も多く見られます。和歌の才能は人生を左右する大切な才能だったわけですね。

【解答】

いく（地名の「生野」と「行く」）
ふみ（「踏み」と手紙の「文」）